

助かってでも厄介者だった



戦争で忘れられないのは、1945年7月の七夕空襲だ。

小学2年の夜、空襲警報のサイレンで目が覚めた。家の外から「火の手が上がったぞ」と叫ぶ声がした。母が妹を背負い、弟と私の手を握って院内国民学校（当時）まで引っ張られるように逃げた。

千葉 通子さん(77) =千葉市若葉区

語る戦争

戦後70年

5

焼夷弾と照明弾で夜なのに明るかった。

着いたときには学校からも火が出ていた。幅6分の道は逃げてきた人で一杯で、身動きできなかつた。道の脇には黒焦げの死体が並んでいて、ぞっとした。

自宅は焼けてしまい、その日のうちに千葉市亀岡町の叔母の家へ行った。そこには、

同じように家を失った人がたくさんいた。長居はできず、母の実家がある秋田県横手町（現・横手市）に移った。

そこでも自分たちは厄介者だった。屋根は同じでも食卓は別。米粒と青い葉を煮た雑炊でしのいだ。いとは白米を食べ、「こび」と呼ぶおこげをおかわりしていた。自分から「食べたい」とは言わなかつた。母はどれほどつらい思いをしただろうか。

家族は全員助かつたが、それが後ろめたくもあつた。戦争体験者が減り、このままではいけないと思ひ、自分の体験を話すようになった。

（棚橋咲月）

■ひと言■

戦争を風化させてはいけない。